

平和祈念展示資料館 特別展示

「漫画と絵本で伝えるシベリア抑留

『凍りの掌』『氷海のクロ』原画展」 連携企画

シベリア抑留関連証言映像上映会

平和祈念展示資料館が九段生涯学習館で開催する特別展示との連携企画として、シベリア抑留を体験した戦傷病者の証言映像を上映します。

上映場所：しょうけい館 1階 証言映像シアター

上映期間：2021年10月6日（水）～10月12日（火）

上映時間：10：00～17：00

シベリア珪肺を抱えながら

毎時0分
より上映

国鉄に勤務中、昭和19年10月に陸軍に入営。11月に満洲へ。砲兵隊の観測員となる。終戦時はナホトカでソ連軍に投降、そのままシベリア抑留の身となる。抑留地は森林地帯にある鉱山のブッカッカ収容所だった。栄養状態が劣悪ななか、削岩機を用いての鉱山労働では、顔が能面のように真っ白になるほど粉じんを吸い込んでしまった。22年4月、労働中の怪我がもとで内地還送となり、国鉄に復帰、昭和54年に受けた検査でシベリア珪肺が発覚する。この有効な治療方法の無い病を抱えながらも、妻と共に生きる。

シベリア珪肺～今も続く後遺症～

毎時17分
より上映

満洲の戦車第一連隊に配属され、戦車の操縦手をつとめ、奉天で終戦を迎える。戦後はソ連軍にカザフアルマータの収容所に抑留され、昭和20年11月から昭和22年8月までチェケリ鉛鉱山で坑内作業に従事。削岩機の係りとして粉塵の中を働いた。昭和22年10月に帰国。農家の長男として一家を支えていたが、昭和30年に珪肺に侵されていることがわかり、その後、入退院を繰り返して、現在に至る。

今日あることに感謝 明日があればさらによし

毎時36分
より上映

昭和18年入営。第232連隊。満洲の公主嶺に駐屯中、終戦を知る。ソ連のカラカンダへ抑留。昭和22年10月8日 炭鉱で採掘作業中、負傷。ドイツ軍医に手術を受ける。昭和23年舞鶴へ。術後治療も施され、帰国後の再手術が不要となった。東京の国立病院で義足訓練後、帰宅。相模原の更生指導所で洋裁の技術を習得。松江で仕事を開始。昭和28年洋裁の仕事で知り合い結婚。今も失った脚の幻痛がある。今ここにいられることがうれしい。「運がよかったと思え」と戒めている。

◆上映時間以外でも、情報検索機にてご覧いただけます。